

第13回 学生政策提案フォーラム in さいたま

テーマ：誰もが自分らしく暮らせる地域共生社会の実現

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



日時 令和6年11月24日[日] 13:00~17:00 (開場 12:30)

場所 RaiBoC Hall (さいたま市民会館おおみや) 7階 小ホール

主催 大学コンソーシアムさいたま※、さいたま市

※加盟大学：埼玉大学／埼玉県立大学／浦和大学／慶應義塾大学薬学部／
芝浦工業大学／聖学院大学／日本赤十字看護大学さいたま看護学部／
日本大学法学部／日本薬科大学／人間総合科学大学／
放送大学埼玉学習センター／目白大学／国際学院埼玉短期大学

＜はじめに＞

「大学コンソーシアムさいたま」は、さいたま市内及び近隣 13 大学の間で、各大学が持つ多彩な魅力や豊富なシーズを相互に活用して共に高めるとともに、連携して活力ある地域社会の形成と発展に寄与することを目的として設立された組織です。

さいたま市と「大学コンソーシアムさいたま」では、加盟大学の学生が、さいたま市の政策について企画検討・提案することにより、地域社会への愛着と関心を深め、ひいてはさいたま市の発展に寄与することを目的に、「学生政策提案フォーラム in さいたま」を開催しています。

＜目次＞

◆ 開催概要	1
◆ 審査委員一覧	2
◆ タイムスケジュール	3
◆ 発表グループ・発表テーマ一覧	4
◆ 政策提案の紹介	
1 チーム UHAS（人間総合科学大学）	5
2 チーム KG Nuts（国際学院埼玉短期大学）	8
3 ブロツコリー（埼玉県立大学）	10
4 佐藤ゼミ（国際学院埼玉短期大学）	13
5 林紀行ゼミナール（日本大学）	16
6 U.D.I.（聖学院大学）	18
7 芝浦工業大学都市計画研究室（芝浦工業大学）	21
8 福島ゼミナール（日本大学）	23
◆ 歴代受賞グループ一覧	25
◆ 「大学コンソーシアムさいたま」とさいたま市との連携について	29
※ 文中敬称略	

第 13 回学生政策提案フォーラム in さいたま開催概要

1 開催の趣旨

「大学コンソーシアムさいたま」加盟大学の学生が、さいたま市の政策について企画検討することにより、地域社会への愛着と関心を深め、もって、さいたま市の発展に寄与することを目的として開催する。

2 主催

・大学コンソーシアムさいたま

(埼玉大学、埼玉県立大学、浦和大学、慶應義塾大学薬学部、芝浦工業大学、聖学院大学、日本赤十字看護大学さいたま看護学部、日本大学法学部、日本薬科大学、人間総合科学大学、放送大学埼玉学習センター、目白大学、国際学院埼玉短期大学)

・さいたま市（事務局）

3 開催日時・場所

(1) 日時

令和 6 年 11 月 24 日（日） 13 時 00 分から 17 時 00 分まで

(2) 場所

RaiBoC Hall（さいたま市民会館おおみや）7 階 小ホール（大宮区大門町 2-118）

4 テーマ

誰もが自分らしく暮らせる地域共生社会の実現

5 審査及び表彰

(1) 審査

審査委員による審査の結果、合計得点が最も高いグループを最優秀賞とし、次点から 3 グループを優秀賞とする。同点の場合は、審査委員長が順位を決定する。

(2) 表彰

最優秀賞（1 グループ）及び優秀賞（3 グループ）の各グループに対し表彰を行う。

「第 13 回学生政策提案フォーラム in さいたま」審査委員

	団体名等	氏名	備考
1	学校法人先端教育機構 事業構想大学院大学 事業構想研究所 教授	かわむら まさみ 河村 昌美	審査委員長
2	一般社団法人キャリアチャレンジ総合研究所 代表理事	いまい ふさこ 今井 房子	
3	株式会社 カインズ コーポレートサポート本部 カスタマーサービス部長	にしむら のぞみ 西村 望	
4	さいたま市 都市戦略本部 行財政改革推進部長	ほそだ しょうさく 細田 尚作	
5	さいたま市 都市戦略本部 都市経営戦略部副参事（シティセールス担当）	かいづ あさこ 海津 麻子	

タイムスケジュール

時間	内容	
13:00	開会、挨拶	
	政策提案の発表 開始（各15分）	
13:10 13:25	1	チーム UHAS（人間総合科学大学） 農業を活用した異文化交流プロジェクト
13:30 13:45	2	チームKG Nuts（国際学院埼玉短期大学） 健康寿命の延伸 ～「食を愉しむ」ことでより豊かに～
13:50 14:05	3	ブロッコリー（埼玉県立大学） 私と地域の交換ノート ～共生社会に向けて～
14:10 14:25	4	佐藤ゼミ（国際学院埼玉短期大学） Creative Recycle Center クリエイティブ・リサイクルセンター ーつくる喜び、新たな価値の創出ー
休憩（10分）		
14:35 14:50	5	林紀行ゼミナール（日本大学） 見架ける、呼び架ける ～障がい理解への架け橋に～
14:55 15:10	6	U.D.I.（聖学院大学） 障害者への偏見・差別を無くす啓発活動
15:15 15:30	7	芝浦工業大学 都市計画研究室（芝浦工業大学） 公民学連携によるみんなの居場所づくり(多世代)
15:35 15:50	8	福島ゼミナール（日本大学） WALK&WALK（わくわく）さいたま
	政策提案の発表 終了	
休憩（25分）		
16:15	審査結果の発表・表彰	
16:30	審査委員長による審査結果の講評	
16:45	市長挨拶	
16:50	閉会	
16:55	記念撮影（受賞グループ、全体）	
17:00	解散	

※当日の進行状況により変更する場合がありますので、ご了承ください。

第13回学生政策提案フォーラムinさいたま 参加グループ・発表テーマ一覧（発表順）

順番	大学名	グループ名	発表テーマ
1	人間総合科学大学	チーム UHAS	農業を活用した異文化交流プロジェクト
2	国際学院埼玉短期大学	チームKG Nuts	健康寿命の延伸 ～「食を愉しむ」ことでより豊かに～
3	埼玉県立大学	ブロッコリー	私と地域の交換ノート ～共生社会に向けて～
4	国際学院埼玉短期大学	佐藤ゼミ	Creative Recycle Center クリエイティブ・リサイクルセンター —つくる喜び、新たな価値の創出—
5	日本大学	林紀行ゼミナール	見架ける、呼び架ける ～障がい理解への架け橋に～
6	聖学院大学	U.D.I.	障害者への偏見・差別を無くす啓発活動
7	芝浦工業大学	芝浦工業大学都市計画研究室	公民学連携によるみんなの居場所づくり(多世代)
8	日本大学	福島ゼミナール	わく わく WALK & WALKさいたま

グループ紹介

大 学 名	人間総合科学大学
グ ル ー プ 名	チーム UHAS
発 表 テ ー マ	農業を活用した異文化交流プロジェクト
指 導 教 員	梅國 智子
参 加 学 生 数	14 名

検討・提案について（アピールポイント、反省点、所感など）

【アピールポイント】

本提案ではさいたま市で生活する日本人と外国人の方々が暮らしやすいまちづくりを目指す。

外国人がさいたま市で生活していて困ったことを実際に聞き取り、困りごとの多くはお互いを知ることができれば解決できると考え、今回の提案に至った。提案内容である「農業を活用した異文化交流プロジェクト」では農業、さらには料理教室を開催することで、外国人と日本人が交流するきっかけとなり、お互いの文化を知ることにつながり、誰もが自分らしく暮らせる地域共生社会の実現が期待できる。

【反省点】

さいたま市には様々な国籍を持つ外国人がいるため、コミュニケーションをとる際に対応できない言語がある可能性がある。

イベントの開催にはさいたま市などの公共機関や、さらに外国人の言語や文化に詳しい専門家との連携が必要である。

【所感】

さいたま市の日本語教室に参加している外国人の方に生活していて困ったことを尋ねたところ、外見で外国人と思われ避けられたという意見があった。なぜこのようなことが起こるのかを学生間で話し合った際に、外国人の文化や価値観について双方がよく理解していないため受け入れてもらえないのではないかという意見が多く上がった。“食”は私たちが生きていくうえで最も必要不可欠なことから、“食”に関する農業や料理教室を開催することで日本人と外国人の交流の機会を作り、お互いの文化や価値観を知ることができると考え、今回の提案に至った。

政策提案概要書

【現状】

外国人について

さいたま市統計書の国籍別外国人住民数の調査結果から外国人市民の数が増加傾向にあり、平成 26 年から 10 年間で 11,378 人増加していた。このことから、さいたま市では外国人市民と日本人の双方が住みやすいまちづくりが求められている。

さいたま市の日本語教室に参加している外国人の方に生活していて困ったことを尋ねたところ、「質問したが日本語以外話せないと断られた」、「日本人の友達を作ることに苦労した」、「外見で外国人と思われ避けられた」、「長文の理解に苦労した」などの意見があがった。また、第 5 期さいたま市の外国人市民委員会の提言書から外国人が参加できるボランティアや地域イベントの開催を希望する声が見受けられた。

実際に NPO 法人見沼保全しゃぶしゃぶラボの不耕起田植え体験に参加し、運営スタッフの方にお話を伺ったところ外国人の参加者はほとんどいないことが分かった。

農業について

さいたま市の農業の現状は作物統計調査の結果から耕作面積が減少していることが分かった。また、農業センサスの調査によると農家数、農業従事者が減少していることが分かった。

食について

食事は生命維持には不可欠であり、人間関係やコミュニケーションの形成の役割も担っている。そして、食にかかわるイベントは、世界共通の関心事であると考えた。

【政策概要】

日本人と外国人が一緒に参加できるイベント交流会の開催をすることを考えている。

イベント交流会の内容は、農作業体験①植え付け、農作業体験②収穫、料理教室の 3 段階で構成する。

ターゲットは外国人の親子と日本人市民の親子とした。

開催場所

農業体験①、農業体験②では NPO 法人見沼保全しゃぶしゃぶラボのご協力のもと、開催を考えている。料理教室は当大学の調理実習室での開催を考えている。

スタッフの募集

スタッフはボランティアで人材を集めることを考えている。

ボランティアシティさいたま WEB、社会福祉法人さいたま市社会福祉協議会に依頼を掲載してい

ただ、大学の掲示板で学生のボランティアを募集することを予定している。

参加者の募集

コミュニティを活用する方法と SNS、Web サイトを活用する方法の 2 つを考えている。

コミュニティを活用する方法では日本語教室、小学校でイベントの告知やポスターの掲示、SNS・Web サイトを活用する方法では外国人向けの方法として国際交流員の SNS、さいたま市の外国語版のホームページを活用し日本人向けの方法ではさいたま市の日本語のホームページを活用することを考えている。

費用の確保

開催に伴い費用がかかる。

予算の削減のために、ボランティア人材の活用、食材に規格外野菜を使用することを考えている。また、料理教室のみの参加する方から参加費を払ってもらうことで費用を確保する。

展望

今回のイベント交流会が好評だった場合、外国人に料理を教えてもらう、料理教室の開催を増やす、農業体験できる野菜を増やすことなども考えている。

【効果】

「外国人も参加できる地域イベントを開催してほしい」、「外国人でもボランティア活動に参加する機会を与えてほしい」という外国人の要望に応えることができる。

様々な国の文化を知ることができる異文化への理解が深まり、多文化共生の促進が期待できる。イベント参加が日本人と外国人の交流のきっかけになり、地域の活性化が見込める。

イベントに参加することで双方のコミュニケーション能力の向上に繋がる。

長期的に参加者が集まれば農家の高齢化、人手不足を解消できる。

食べ物への感謝の気持ち、SDGs を学べる。

グループ紹介

大 学 名	国際学院埼玉短期大学
グ ル ー プ 名	チーム KG Nuts
発 表 テ ー マ	健康寿命の延伸 ～「食を楽しむ」ことでより豊かに～
指 導 教 員	鈴木玉枝
参 加 学 生 数	3 名

検討・提案について（アピールポイント、反省点、所感など）

【アピールポイント】

- ・アンケート調査を実施するにあたり、北浦和公園で開催されているラジオ体操、北浦和の自治会主催の芋煮会、別所沼公園でのランニングチームの練習など地域に密着した活動に参加しました。計 6 日間にわたり、対面で調査を実施し、さまざまな意見を伺うことができました。
- ・アンケート調査の方法を質問紙・インターネットからの 2 種類を用意し、忙しい方には後日回答のご協力をいただきました。

【反省点】

- ・設問数が多かったため、アンケートを回答する時間を要してしまい、総件数が 60 件と少なかった。
- ・「シニアのニーズを具体的に把握した上で、健康寿命の延伸に向けた『食』選択力の向上、および食環境の整備についての企画提案する」ことを予定しておりましたが、アンケート調査の結果、シニアよりも手前のプレシニアに課題が明らかになり、ターゲット層が当初の想定から多少ずれました。

【所感】

- ・地域の方と実際にお会いしてお話を聞くことで、地域にあるソーシャルキャピタルの高さを感じました。
- ・今あるサービスを受け身でただ享受する人を増やすことを目的とするのではなく、求めるニーズに応じたリーダーやサポーターを増やす働きかけを行うことが望ましいのではないかと考えます。食に関する情報提供や機会、場を多くし、選択肢やその幅を増やすことで、一歩踏み出す意欲を向上させ、健康寿命の延伸が可能となるのではないかと考えます。

政策提案概要書

【現状】

- ・活動意欲の高い層であっても、60歳未満のプレシニアの栄養バランスは保てておらず、このまま年齢を重ねれば健康寿命を引き下げる可能性が高い。
- ・活動意欲の高いプレシニア・シニアは、サポートのタイミングを逸する可能性がある。
- ・栄養バランスを保つために、食選択の幅を広げる必要がある。特に慢性疾患を患っている方などは、嚥下サポート食など、食形態を考慮した食品を含め、自分に適した食選択をできるようにする必要がある。

【政策概要】

STEP1 ▶自身の栄養状態をしる

- ①『さいたま市健康マイレージ』の活用促進
- ②活動組織・団体で活用できる資料提供

STEP2 ▶食事の重要性について学ぶ

- ①食イベントの開催
- ②地産地消の健康弁当の企画・販売

STEP3 ▶適した食事を実践する

- ①食の健康リーダーの育成・支援
- ②食イベントの企画・実施を後押し

【効果】

①住民の健康寿命の延伸

栄養バランスのとれた食事を摂取する機会を増やし、日々の食生活に取り入れてもらうことにより、健康寿命の延伸が期待できる。

②市民活動への参加率の向上

組織・団体の担い手が健康であり続けることにより、市民活動が継続的に開催され、住民が安定的に参加できる。

③地域の活性化と地元愛の醸成

地域にある資源を活用する機会が増え、地域全体が活性化され、地元への愛着が増す。

グループ紹介

大 学 名	埼玉県立大学
グ ル ー プ 名	ブロッコリー
発 表 テ ー マ	私と地域の交換ノート～共生社会に向けて～
指 導 教 員	鈴木貴子
参 加 学 生 数	4 人

検討・提案について（アピールポイント、反省点、所感など）

【アピールポイント】

本提案ではコミュニティーの参加・拡大により人々の交流を促進し、やり取りを通して地域でともに暮らしているお互いを知り、互いを認め合うことを目指す。

提案内容である「交換ノート」はノートを介したコミュニケーションであり、自分を認めてもらえる懐かしくて新しい手法である。SNS の利用者が多く、簡単に他人と繋がることが出来る現代社会の中で、あえて手書きを用いることで、SNS では感じることの出来ない懐かしさや人の温かみ、個性を体感することが出来る。また、2015 年の文化庁の調査から分かった、手で文字を書く機会が減りつつある中で手書き文字を重要視するという現在の傾向に合った政策である。

【反省点】

反省点として、対象者の幅を広げ、施設連携が必要なために、複数の施設の承認の必要性やノートの管理問題から実現には時間がかかると予想されることが挙げられる。また性別や趣味嗜好の違いによる参加者の偏りや、持続性への工夫が必要である。

【所感】

共生社会について話し合った際、地域の方の顔が分からない、交流が無いといった課題があがったため、自分たちが誰かと仲を深め、互いを更に知るきっかけの一つとして「交換ノート」という意見があり、交換ノートを用いることで人と人とがつながる手段になるのではないかと考えた。

実際にグループ内で交換ノートを行い、文字やイラストで伝える温かさ、その日の出来事の共有から親近感や返事がもらえる嬉しさを感じることができた。しかし書く内容に困ってしまう、書いて渡すのが遅い人がいるので、テーマを決める、質問をする、期間を設けるといった工夫をして継続的にやっていけるように改善していく。

政策提案概要書

【現状】

さいたま市は「共生社会」を目指しており、その中で直面している課題として3つのことに注目した。

1つ目は多世代交流の機会の減少である。令和5年さいたま市市民意識調査より、現在参加している地域活動の割合として、回答者のうち「自治会」が3割半ばで、それ以外の活動はいずれも1割未満であった。一方、「特にない」は、4割半ばであった。

2つ目はイベントの認知度の低さや、参加への躊躇いである。今後力を入れてほしい政策については、多文化共生が13.6%、コミュニティーが12.2%の住民が力を入れてほしいとの回答であった。

3つ目は「さいたま市みんなのアプリ」の利用状況である。令和6年8月時点で加盟店は、で1,178店舗（令和6年度中の目標：加盟店数5,000店舗）、アプリ利用者は約38,000人（令和6年度中の目標：アプリ利用者数20万人）である。

【政策概要】

さいたま市内にある公共施設（老人ホーム、学校、図書館など）間で小グループを作成し、期間を設定し（1施設1週間）、交換ノートを共有する。ノートの最初のページに交換ノートにおけるルールについて紙を貼る。末尾または最初にイベントカレンダーや困ったときの相談窓口アプリのQRコードを貼りインデックスなどで目立つようにする。イベントカレンダーにより地域のイベント参加を誘発する。

交換ノートの記載方法：匿名（ニックネーム）を用い、記載内容は基本自由とする。内容のきっかけとして運営側がヒント（テーマの設定や質問）を定期的に記載しておく。ノートのページ内を区切り、コメント欄を設け内容に対するコメントや返事を書く。誰がどのコメントに返事を書いてもよい。

ルール：文字のみでなく、絵など何を書いても良い。自分が書いた内容の直前に記載している人のコメント欄にはコメントを書く。その他、自分の気になる内容に関してはいくつコメントを残してもいい。誹謗中傷など、相手が不快に感じる内容、コメントは書かない。個人が特定されるような情報は記載しない。いたずら等防止のため設置場所は各施設の職員の目が届く場所にする。

「さいたま市みんなのアプリ」を用い、交換ノートの所在地を随時反映させる。アプリを用いることで、ノートの位置がネット上でも分かり、公共施設に出向くことも出来る。施設間のノート移動、内容のチェック、コメント欄の設置はボランティアに行ってもらう。参加したボランティアの方にはさいたま市のポイント「たまポン」を支給する。使用するノート、色鉛筆などは、自宅等で使用しなくなった物を回収し、使用する。個人が使用しなくなった物をリユースでき、SDGsに繋がる。

【効果】

上記のような交換ノートを利用することで幅広い年代や価値観を持つ人々との関わり合いを通して多様性理解を深め、共生を図る。自分のコメントに対する返事を得ることで、地域とのつながりの実感や小さな喜びを得て、積み重ねていくことができ、自己肯定感を感じることもつながる。

匿名で個人で参加できるため、地域のイベントなどに参加することに心理的抵抗のある方でも参加しやすく、これまでイベントなどに参加しなかった方達の参加が期待できる。

交換ノートやイベントの参加により、コミュニティが活性化することに加え、人々の交流が増えることで、人とのつながりを肌で感じ安心して生活できる。

さいたま市の店舗の協賛により、さいたま市内での経済の循環が促進される。「さいたま市みんなのアプリ」の利用者数の増加が期待される。

地域の人との交流、アプリ利用を通して、今まで知らなかったさいたま市の魅力を感じて住み続けたいと思えるきっかけになる。また、地域の一員であると実感できる。

グループ紹介

大学名	国際学院埼玉短期大学
グループ名	佐藤ゼミ
発表テーマ	Creative Recycle Center クリエイティブ・リサイクルセンター —つくる喜び、新たな価値の創出—
指導教員	佐藤 牧子
参加学生数	10名（＊当日参加は6名）

検討・提案について（アピールポイント、反省点、所感など）

【アピールポイント】

本提案「クリエイティブ・リサイクルセンター」の取組みは、企業や工場から出される廃材・リサイクル素材に着目し、それらの素材を造形素材として教育施設やその他の施設、地域の人などに提供すると同時に、技術や情報、創作活動の場を提供する子どもから大人までを対象にした＜創造の拠点＞である。本提案は、子どもたちの造形活動を充実したものにしていくという教育的な観点に加え、企業・工場等においてはリサイクルや社会貢献（教育に関わるという）の観点からも期待ができる取組みである。

そして、現時点ではつながりをもたない教育現場・施設や会社・工場、地域や個人などが、創造的な活動を通して「つくる喜び」を共有しながらつながることができる。新たなつながりは、新たな視点を生み、さらに新たな視点がこれまで埋もれていた「人・モノ・コト・空間」を発掘することにつながる点が、本提案のアピールポイントの1つである。

さらに、廃材が造形素材に生まれ変わるという新たな視点を提示することにより、「創造力」が刺激されると同時に、モノと向き合う機会を得て、「モノを大切にしよう」という気持ちの芽生えにつながることが期待できる。これらは、さいたま市の掲げる「市民満足度（CS）」と「SDGs」の促進に寄与することができる点もアピールポイントである。

【反省点】

1 点目：「造形素材となりうる廃材の回収方法、運搬方法、回収経路」、「人員配置を含めたセンターの運用方法」、「広く協力者を得るための方法」などの継続的なセンターの運用を踏まえたシステムの検討が十分に行えなかった点

2 点目：「場所代」、「人件費」、「安全面・衛生面を確保するための消毒剤等の費用」、「運搬等に係る費用」などの概算を提示できなかった点

3 点目：似た実践がいくつか散見されたが、詳細の調査までには至らなかった点

【所感】

廃材やリサイクル素材を活用したり、素材について紹介し、作品を提示したりすることを通して、たくさんの人と出会いかわることができた。そして、人と人のつながりの輪が広がっていくこととその喜びを実感することができた。これらの体験からも、廃材やリサイクル素材など、今まで廃棄していたモノたちに新たな価値が見出されていくことは、人々の視野を広げることもつながっていくだろうと感じている。一人一人が小さいながらも、新たな視点をもち視野を広げていくことは、さいたま市が多様性を受け入れる住みやすい街として存続していくことにもつながると考えた。

政策提案概要書

【現状】

保育や教育の現場では、「創意工夫が必要とされ、創造的な活動の展開が期待できる」、「素材にかかる費用をおさえても、充実した活動ができる」といった理由から、日常的に廃材やリサイクル素材を造形素材として活用している。しかし課題として、「素材の種類が限られてしまう点」、「新たな造形素材を探し、入手するための時間的余裕が保育・教育の現場にはない点」、「企業や工場からの寄付される素材を安定的に確保することが難しい点」、「さまざまな素材に対応するための技術習得の場がない点」などがあげられている。

一方、企業や工場では、リサイクルできずに廃棄するモノの中に活用可能性を感じられる素材があるものの活用方法が分からず廃棄せざるを得ない現状がある。

【政策概要】

企業や工場から出される廃材・リサイクル素材に着目し、それらの素材を造形素材として教育施設やその他の施設、地域の人などに提供すると同時に、技術や情報、創作活動の場を提供する＜創造の拠点＞クリエイティブ・リサイクルセンターの設立と運用を提案する。

本提案は、子どもたちの造形活動を充実したものにしていこうという教育的な観点に加え、企業・工場等においてはリサイクルや社会貢献（教育に関わるという）の観点からも期待ができる取組である。行政が関わり「政策」として実施することにより、提案の肝となる「協力してくれる企業や工場、利用者を多く募ること」を叶えることができ、取組みの効果を広く波及させることができる。

【効果】

- 属性の違いを超えて、＜つくる喜び＞が得られる＜創造 Creative＞の場が生まれる。

クリエイティブ・リサイクルセンターは、自由に造形活動、創作を楽しむことができ、創作の幅が広がったり、造形技術を教え合ったりするだけでなく、素材を提供して下さる方、企業に活用の仕方を提案、報告することにより、提供して下さる方にも新たな活用を見出すきっかけの場となる。

- 廃棄されるモノや素材に新たな価値を見出すことができる。

「政策」にすることにより、活動の輪が広がり、造形素材（リサイクル素材や廃材）の収集に協力してくれる人も増え、造形素材の種類を増やすことができるため、今まで廃棄したものや素材に新たな価値を生み出すことにもつながる。また、リサイクル意識の高まりも期待できる。

- さまざまな技術を持っている人材を発掘し、地域や教育に還元することができる。
- 新たな居場所［サードプレイス Third Place］が生まれる。
- 人や場（企業など）がつながり、SDGs の取り組みの輪が広がる。

さいたま市の掲げる「市民満足度（Citizen Satisfaction）」と「SDGs」の促進に寄与することにもつながる。

グループ紹介

大 学 名	日本大学
グ ル ー プ 名	林紀行ゼミナール
発 表 テ ー マ	見架ける、呼び架ける ～障がい理解への架け橋に～
指 導 教 員	林 紀行
参 加 学 生 数	16名

検討・提案について（アピールポイント、反省点、所感など）

【アピールポイント】

本提案では、さいたま市には障がいに関するイベントや施設がある一方で、健常者が障がいに関心を持つことができていないという点に着目した。誰もが自分らしく暮らせる地域共生社会の実現には、健常者が自ら障がいに対して理解を深めていく必要がある。この点において、実際に日頃から障がい者と接している埼玉県障害者交流センターの職員の方や、障がいに関するイベントを実施しているさいたま市役所の方に生の声を調査した。そして、障がいに関することについてのアンケート調査を実施したことで健常者の障がいについての関心度を確認し、それらの課題を解決することを目的として本提案を作成した。

ブースのターゲットを「子ども」に設定し、子どもが楽しみながら障がいについて学ぶことができるような内容を企画した。また、子どもをターゲットにすることで親子での参加を見込むことができ、家族で障がいについて学ぶことができる場となることが期待できる。ブースの設置場所は、障がいに関係のないイベント会場にすることで障がいについて関心度が低い来場者の関心度も高めることができるほか、運営については大学生が行うことによって将来に渡って持続可能な運営を実現する。既存のイベントを繋ぐことの利点を活かすことで障がいについて関心を高めることへの実効性にこだわった。

【反省点・所感】

反省点としては、ブースを設置するイベントの参加者が見込めなければ、ブースへの参加者が限定されるという点である。また、イベントの来場者を確保することができても、ブースへ呼び込むために来場者を惹きつけなければいけない。この点を具体的に考える段階まで到達することができれば、ブースの開催により近い具体案を出すことができたろう。障がいに関するイベントの参加者が少なく、障がい者ボランティアの大半を高齢者が占めているというさいたま市の現状を踏まえたうえで、「誰もが自分らしく暮らせる地域共生社会の実現」を達成するために既存のイベントにアプローチし、子どもを対象とすることで、実現可能性と実効性の両立した提案である。

政策提案概要書

【現状】

埼玉県障害者交流センターやさいたま市役所での現地調査の結果から、障がいに関するイベントは既に実施されているが、イベントの参加者が少ないことやボランティアが足りていないという課題が挙げられた。さらに、障がいに関することについてのアンケート調査では、障がいに関する言葉の認知度の低さと障がい者ボランティアの経験割合の低さから健常者の障がいに対する関心の低さがうかがえる。これらの課題を解決するため、健常者の障がいについての関心を高めてさいたま市で実施されている障がい者イベントである「市民のつどい」へ参加を促すことは、障がいのあるなしにかかわらず共に暮らせる地域づくりに繋がると考える。

【政策概要】

「見架ける、呼び架ける～障がい理解への架け橋に～」とは、現在さいたま市で実施されている障がいに関係ないイベント会場に来た参加者に、「市民のつどい」へ参加を促すためにブースを設けるというものである。ブースの内容には、「市民のつどい」へ参加を促すためにまずは障がいや障がい者について知ることができるクイズを企画した。子どもでも楽しみながら学ぶことができるクイズとして、障がい者マークや障がい者ボランティア、手話、点字などについて考えられ、障がい者の立場に立ち体感しながらクイズに参加できるようにする。クイズの内容は、子どもでも理解しやすいイラストと普段身の回りにあるものを中心としたクイズにすることで、自然と障がいへ理解や関心を高めることに加え、参加者が自身の日常生活で障がいについて意識しやすくなるものとする。運営する大学生はクイズのサポートや解説を行い、来場者が障がい者の視点で考える手助けをする。ブースに参加し、障がいに関心を持ってもらうことで、既存のさいたま市で行われている「市民のつどい」への参加を促す。ブースの最後には、子どもが参加しやすいシールアンケートを実施することで、理解度の調査や次回以降の改善に繋がっていく。また、「さらに障がいについて学びたい、サポートしたい」と感じた参加者向けに参加のはじめの一步として、ボランティア登録ブースを設けることで障がい者ボランティアの増加にも期待する。

【効果】

ブースのターゲットを「子ども」に設定することで、子どもから大人まで参加することが見込まれることから、子どもから大人まで幅広い層に向けた発信を行うことができる。ブースに参加したことで、障がいに関する事柄の認知度や関心を高め、既存の障がいに関するイベントに足を運んでもらうことで、参加者数が少ないことが課題であったイベントの活性化をすることができる。また、障がい、障がい者ボランティアについて知ることから障がい者と接することへのハードルが下がることや大学生が運営することで、運営側も関心が湧いてボランティアにつながることも期待する。

健常者の障がいについての理解を高めることにより、さいたま市として「2030 さいたま」において課題として設定している「障害に対する差別や偏見を無くし、障害のある人が不当な制約を受けることがないように障害に対する正しい理解を促進する」を達成することができ、地域共生社会を実現することができる。

グループ紹介

大 学 名	聖学院大学
グ ル ー プ 名	U.D.I.
発 表 テ ー マ	障害者への偏見・差別を無くす啓発活動
指 導 教 員	八木規子
参 加 学 生 数	23 名

検討・提案について（アピールポイント、反省点、所感など）

【アピールポイント】

- 差別・偏見を減らすためには、そうした意識や行動をまだ持っていない小中学生に働きかけることの重要性をアピールした。
- そのような重要性を持つ小中学校のカリキュラムの作成は、各校に委ねられている。これに関して、包括的なガイドラインの作成を提案した。
- 障害者に対する理解を深め、インクルーシブな社会を作るための活動をしている一般市民の活動を把握する仕組みが不十分であることを指摘した。
- そのうえで、市民活動サポートセンターの取り組みに関して、広報面の強化に関する提案をした。

【反省点】

- グループで質問を考えると、もっと具体的な情報を含めた質問をするべきだった。
- 小中学校がどんな学習を行っているかについて、実際に見ることができなかった。
- 質問を、所轄外の部署に送ってしまった。

【所感】

- この活動を通じて、さいたま市が行っている、障害者に関する様々な活動を知ることができた。
- グループのメンバー同士の意見交換が非常に有意義であったと感じる。各自が持ち寄った情報や視点を通して、さいたま市の障害者に対する差別や偏見を減らすためのアプローチを考えることができた。
- SDGs を行なっていくことや、男女の平等を目指すならば障害者も例外ではないと思う。同じ社会で生きていく人の不平等をなくすことは、簡単なことではないので、今後、学習を経験した小・中学生が障害者に対して、差別・偏見を抱くことなく社会で活躍をしていくことが差別をなくすことに繋がっていくと思う。
- ベトナムではこのような活動がほとんどないので、それはすごくいいと思う。

政策提案概要書

【現状】

<小中学生>

- さいたま市では「さいたま市小中一貫教育」カリキュラムを参考として、自校の実態に基づき、カリキュラムを作成している。各学校、各学年が学ぶ内容は、各校が決めているので、詳細を市が把握しているわけではない。
- 研究発表校による発表を見ることで、各校の事例が分かると思われる。

<一般市民>

- 障害者週間（12月3日～9日）に市民のつどいを開催。
- 年間を通じて、さまざまな障害者スポーツ・イベントが開催されている。
- 「誰もが共に暮らすための障害者の権利の擁護等に関する条例」（ノーマライゼーション条例）に関する取組を進めている。
- 市民活動団体への支援や地域人材の育成は、市民活動サポートセンターが管轄している。しかし、市民活動団体の活動は、市民活動サポートセンターのウェブサイトを見てもよく分からない。これは、活動団体から一定の要望があった活動のみを掲載しているため。

【政策概要】

<小中学生>

- 各校が自主的にカリキュラムを作ることが前提ではあるが、たとえば、ガイドラインを示すことを提案する。たとえば、
 - 座学と体験を組み合わせた授業を実施する。体験例としては、学校内で危険な場所を見つけ、アイマスクや白状、車椅子を使って、危険であることを体験する。それによって、校舎やまちの設備でどのようなものが無くなれば、障害者にとって安全になるかを生徒が提案する。
 - 生徒と障害者が交わる活動を取り入れる。
 - 生徒だけでなく、保護者も参加するようなプログラムを作る。

<一般市民>

- 活動内容の広報、告知方法を改善する。たとえば、
 - さいたま市にはすでに公式 X があるが、あまり多くの人に見られていない。事務的な内容の投稿だけでなく、話題になるような投稿や興味を惹かれるような投稿をしてはどうか。
 - 市民活動サポートセンターのウェブサイトに掲載する、各市民活動団体の活動情報の更新、整備を進める。各団体が直接活動情報を提出するとか、団体の活動にたいして、市民からのフィードバックを収集するためのシステムを作る、等。
 - 活動に参加した市民へのアンケートの質問項目を工夫する。「はい」「いいえ」で答えられる質問の他に、内容について書かせる質問を追加する。これにより、どの活動が生徒に対して、影響を与えたかが分かり、今後の活動の改善に活かすことができる。

【効果】

- 障害者と健常者の相互理解の向上
- 障害者に対する偏見や差別の減少
- 障害者がより快適に生活し、社会に参加しやすくなる環境整備への後押しの増加

グループ紹介

大 学 名	芝浦工業大学
グ ル ー プ 名	(フリガナ) シバウラコウギョウダイガク トシケイカクケンキュウシツ チーム名： 芝浦工業大学都市計画研究室
発 表 テ ー マ	公民学連携によるみんなの居場所づくり(多世代)
指 導 教 員	作山康
参 加 学 生 数	6 名

検討・提案について（アピールポイント、反省点、所感など）

【アピールポイント】

- 1.居場所づくりが幸福度を高め、さらに健康寿命が伸びる効果があることが研究でわかっていることから、高齢者をはじめ子どもや若者、大人すべてにとって居場所(みんなの秘密基地)づくりは SDGs につながる。
- 2.居場所づくりの活動支援などのソフト面だけでなく、行ってみたい参加してみたいと思わせる空間づくり(ハード整備)がセットの支援政策がなかった(使えても十分でない)ので、実証実験を行いその効果を検証して政策している。
- 3.高齢者主体、子供主体という政策ではなく、子供から高齢者、外国人まで誰一人取り残されない「居場所づくり」の初動機行政支援の政策提案であり、空間の魅力づくりが活動のやる気をおこさせるというのがポイント。特に事業の立ち上げは素人にはハードルが高い。

【反省点】

- 1.現在実証実験中で無料 DIY 室は完成したが、モデルの居場所の完成があと 1 ヶ月弱必要であるため、リノベ・リフォーム効果が目に見えないことと、ハード整備の効果をアンケートやヒアリングによるエビデンスとして集計できないこと。
- 2.クラウドファンディングや市・社会福祉協議会やその他の支援制度、を複合して実施すれば実施可能ではあるため、制度的にはできてしまうという指摘がある。しかし素人にはそれらの制度の申請は 1 つだけでも難しいことや、助成金額はハード整備に十分でない。

【所感】

・現在大学の研究費や財団研究費助成、埼玉県社会福祉協議会助成制度などを活用して実証実験を行なっているが、途中であるが好評であるものの大学の知恵と経験、資金集客力がないと簡単ではないと感じたため、行政の制度として確立していれば需要はありそうと感じている。

政策提案概要書

【現状】

上尾市 UR 原市団地の空き店舗を活用して 11 年前に芝浦工業大学サテライトラボを開設して以後、小図書館開設、コミュニティカフェ(石窯ピザ)、屋台居酒屋、麻雀カフェ、健康相談、コミュニティガーデン、ゲームカフェ(子ども食堂の軽食版)など、地域コミュニティの活性化のための様々なプロジェクトを学生提案で実施してきたが、整備資金の不足、男性高齢者の参加が少ない、高齢者中心の活動になりがち、子どもの母親世代が活動してみたいと思わせる雰囲気ではないなどの反省がある。一方、任意の市民団体からリフォーム・リノベの設計ワークショップで、こんな部屋ができればいいという声が住民から出てきた。

【政策概要】

1. 「公民学連携によるみんなの居場所づくり」とは、外国人を含む多世代による「みんなの秘密基地」による多世代居場所づくり+リノベ・リフォーム事業」を軸としたリノベ事業とソフト事業の総合的な対策である。以下は上記事業の活用タイプである。
2. 市民ボランティアによる楽しめる子供英語教室は、学童や学校補講等に取り残された児童や、子どもと親子の居場所づくりでもあり、子ども食堂と連携した居場所づくりとして利用できる。また、留学生や外国人居住者との交流の場として活用できる。既存の「さいたま市子どもの居場所づくりの学習支援、英語教室」や「グローバル・スタディ」との連携や強化タイプ。
3. フリーDIY 工房(ミシンもあり) タイプは、男性高齢者等の生きがい対策(高齢介護)であるとともに、親子の母親ニーズなどに対応した工作需要に対応した工房スタートアップ支援タイプである。工作空間と工作道具を無料で貸し出してくれるところが近隣にあるとコミュニティ活動促進につながる。
4. フリーDIY 工房を活用して、民間賃貸や空き家等での DIY リフォーム・リノベによって活用意向が高めるためのパイロット事業で、さいたま市版 DIY 賃貸契約ガイドラインの作成も行う空き家活用支援タイプ。個人事業者や個人がマイクロコミュニティビジネスとして活用することも可能とする。

【効果】

1. これまでコミュニティ活動で参加機会が少ない男性高齢者が参加する機会が増える。
2. 魅力的な居場所空間(秘密基地)を完成型にしなくても徐々に作り上げていくプロセスを参加者と楽しみ、また各世代別属性別に使うのではなく、各世代が交流できる場となる。
3. フリーDIY 工房で各種コミュニティ活動で必要となる工作物(例えば屋台やベンチ)や自宅リフォームの修理や製作がいつでもできるため、コミュニティ活動の質的向上や居住環境の向上、空き家活用の促進に効果がある。
4. 小図書館運営での経験から、自治会などの少しの予算で施設管理運営(DIY 指導者や秘密基地鍵の開閉)を時給 100 円～200 円程度(週 3 日各 5 時間くらい)であっても、希望者は多くマイクロコミュニティビジネスとしても成り立つことがわかったため、元大工さんや DIY 経験者などが指導員となって男性高齢者等の参加が期待できる。

グループ紹介

大 学 名	日本大学
グ ル ー プ 名	福島ゼミナル
発 表 テ ー マ	わく わく WALK&WALK さいたま
指 導 教 員	福島康仁
参 加 学 生 数	12名

検討・提案について（アピールポイント、反省点、所感など）

【アピールポイント】

本提案におけるウォーキング政策は一般的な運動にとどまらない。

ポイントスポットの位置選択を子どもに行わせることにより、地域学習の一環になる。またゲーム性を持たせることにより、子どもが興味を持つ要因にもなる。また、大人には景品獲得のチャンスがある。これらのように子どもと大人を政策に巻き込むことにより、子どもと大人が一緒に楽しめる政策になっている。したがって時間がなくても子どもと遊びながらウォーキングを楽しめるという政策になっている。

【反省点】

テーマに基づく定義付けや課題設定に時間がかかった。また、データに基づく政策提言を行おうと試みた結果、データの収集に時間を要し、かつデータの精査作業に労を要した。

【所感】

今回はアプリを絡めた政策を行ったが、商店街を含めたソフト面の政策も挑戦したいと考えている。

政策提案概要書

【現状】

さいたま市における令和 4 年度の医科医療費に占める生活習慣病医療費は 41.6%であり、この数値は政令指定都市の千葉市と比較したところ高いことが分かった。また、さいたま市内の年代別運動習慣調査から子育て世帯の多い 30 代、40 代の運動習慣が低く、千葉市の 30 代と 40 代の運動習慣を比較すると、さいたま市の運動習慣が低いということがわかった。運動を行わない理由として 80%の人が子育てなどで時間がないと該当調査で答えた。このことから、生活習慣病を予防し、医療費を削減するため、30 代から 40 代の子育て世帯を対象に、親子共に若いうちから運動を習慣化することが必要だと考えた。

【政策概要】

私たちの考える「誰もが自分らしく暮らせる地域共生社会」とは、健康な体と時間があること、地域への愛着を幼い頃から醸成することである。私たちが提案するのは【WALK & WALK さいたま】というウォーキングを継続的に行うための政策である。この政策は既存のアプリである【さいたま市健康マイレージ】を活用し親子共にゲーム感覚でウォーキングを行う政策である。

この政策は主にステージ形式と自由開拓ルートの 2 つから構成されている。

ステージ形式

- ① ステージ（レベル）を 10 個用意する。
- ② 数個のポイントスポットを巡り QR コードで合言葉獲得する。
- ③ 1 つのステージを歩き切り合言葉を組み合わせると次のステージが解放される。
（ステージが低いほど距離を短くポイントスポットを配置）さらに、難易度の高いステージになると、商店街での店員との会話がクリア必須条件となる。
- ④ ポイントスポットで獲得した文字はアプリ内に記憶される。この仕組みによりゲーム感覚でウォーキングを楽しむことが可能になる。

自由開拓ルート

- ① アプリ内に表示されるスポットの文字を実際に歩いて繋ぎ、指定された単語を完成させるミッションを 1 週間ごとに配信する。
- ② 記憶された文字をもとに単語を繋げる。
- ③ 単語の長さごとに獲得ポイントが変動する。

この一連の流れにより、後半のステージや解放後も飽きさせない仕掛けが詰め込まれている。

【効果】

市民は長期的な取り組みを通じて、運動が習慣化され、生活習慣病予防につながり健康になる。また、親子で一緒に運動することで親子のつながりが深まる。さらに、商店街にポイントスポットが設置されることにより、地域の人と会話をすることで、つながりができる。したがって、「誰もが自分らしく暮らせる地域共生社会」の実現が期待できる。

歴代受賞グループ一覧

第1回 平成23年11月20日（シーノ大宮センタープラザ 10階多目的ホール）

提案テーマ さいたま市を魅力あるまちにするための政策・事業

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	内田ゼミ	共栄大学	ツール・ド・さいたま ～日本最大級のサイクルイベントへの開催～
優秀賞	花盛り（はなざかり）	聖学院大学	さいたま市空き地・休耕地活用事業
	埼玉県立大学 作業療法グループ	埼玉県立大学	義務教育におけるノーマライゼーションをめざして
	外山ゼミナールチーム ～100年の絆～	日本大学	さいたま市これからの100年 ～官学協働計画～

第2回 平成24年11月18日（シーノ大宮センタープラザ 10階多目的ホール）

提案テーマ さいたま市のブランド力の向上のための政策・事業

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	内田ゼミ	共栄大学	さいたま発の盆栽ブランドの開発
優秀賞	S P U ☆ O T 9	埼玉県立大学	さいたま10の区地域の輪 ～地域交流活性化を目指したシステム構築～
	外山ゼミナールA	日本大学	『鉄道のみち ルネッサンス計画』
	外山ゼミナールB	日本大学	さいたま11区を創ろう！しあわせタウン

第3回 平成25年11月24日（武蔵浦和コミュニティセンター 9階多目的ホール）

提案テーマ さいたま市を「選ばれる都市」にするための政策・事業

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	福島ゼミナールA	日本大学	I C Tによる交通政策
優秀賞	内田ゼミ	共栄大学	人形の町さいたまの復活
	社会福祉学科3年	埼玉県立大学	都市交縁（こうえん）計画～公園から始まる地域のつながり～
	川俣ふぉーらむ	埼玉県立大学	市民に愛される街～市民参加型の新しいフォーラムの形～

第4回 平成26年11月16日（武蔵浦和コミュニティセンター 9階多目的ホール）

提案テーマ 市民一人ひとりがしあわせを実感でき、市民や企業から選ばれる都市にするために

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	福島ゼミナールA	日本大学	振り込め詐欺対策
優秀賞	健康栄養 & 幼児保育学科 コラボチーム	国際学院埼玉短期大学	『さいたま市ヘルスプラン 21 目標達成に向けて』～“ヌウ”ってメタボじゃない!? このままで大丈夫!? ～
	Let's OT!	埼玉県立大学	コミュニティ強化のための「心の視覚化政策」
	内田ゼミ	共栄大学	低糖質でメタボ中年からスイーツ紳士へ～ 健康都市 さいたま ～

第5回 平成27年11月8日（武蔵浦和コミュニティセンター 9階多目的ホール）

提案テーマ さいたま市のおもてなしスタイル

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	齋藤ゼミナール	埼玉大学	うちわによるオリンピックの暑さ対策
優秀賞	Shall We OT?	埼玉県立大学	Boys, be ambitious 計画～高校生ボランティアと医療アプリの普及について～
	福島ゼミナールA	日本大学	文化芸術によるおもてなし
	福島ゼミナールB	日本大学	まちの美化によるおもてなし

第6回 平成28年11月20日（シーノ大宮センタープラザ 10階多目的ホール）

提案テーマ 東日本の交流拠点都市

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	OT'S	埼玉県立大学	ウォーキング×イベント～東日本まると健幸プラン～
優秀賞	福島ゼミナールA	日本大学	かるたを使って発信～東日本の魅力が見つかるた
	福島ゼミナールB	日本大学	～備えあれば憂いなし～シェルたまプロジェクト
	齋藤ゼミナール	埼玉大学	Relations of Victory～VRを活用した広域連携による観光促進事業～

第7回 平成 29 年 11 月 19 日（シーノ大宮センタープラザ 10 階多目的ホール）

提案テーマ 若い世代の定住促進

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	齋藤ゼミナール	埼玉大学	3 S System Saitama Scholarships return Support～定住のための若者支援制度～
優秀賞	UHAS.com	人間総合科学 大学	埼食健美 健康ダイエット in さいたま
	福島ゼミナール B	日本大学	SAITAMArriage さいたまリッジ
	OT'ASH	埼玉県立大学	自分らしく生きられるさいたま市～あいたまアプリでさいたま？からさいたま！へ～

第8回 平成 30 年 11 月 18 日（シーノ大宮センタープラザ 10 階多目的ホール）

提案テーマ 健康で活力ある「スポーツのまちさいたま」

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	チーム青志	人間総合科学 大学	彩★スポ ジュニア栄養サポート制度
優秀賞	齋藤ゼミ	埼玉大学	Reward×Walk ～歩いて手にする商品と健康～
	健康増進授業	芝浦工業大学	大学を拠点とした健康増進授業の取り組み ～健康で、笑顔のあふれるまちづくりのために大学ができること・・・～
	押久保ゼミ	埼玉県立大学	スキマ時間でスポーツを身近に ～ふっくらたまちゃんスリム化作戦～

第9回 令和元年 11 月 24 日（武蔵浦和コミュニティセンター 9 階多目的ホール）

提案テーマ 東京 2020 大会に向けたおもてなし

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	さいたまオアシスプロジェクト	芝浦工業大学	東京オリンピック・パラリンピック開催時の雪の利活用促進について
優秀賞	齋藤ゼミナール	埼玉大学	まんがを用いた情報発信
	福島ゼミナール A チーム	日本大学	シュート風呂敷 in さいたま
	福島ゼミナール B チーム	日本大学	フォトタマリー

第 10 回 令和 3 年 11 月 7 日（オンライン開催）

提案テーマ「SDGs」先進都市

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	久保田ゼミ	埼玉県立大学	さいたまに気づこう！広めよう！ 家でも外でも健康アプリ
優秀賞	TeamA	埼玉大学	NEXT SDGs—SDGs 未来都市さいたま市への提言
	最適システムデザイン研究室	芝浦工業大学	MaaS を想定したコネクティッドバスシステム
	斎藤ゼミナール	埼玉大学	雨天決行！歩いて健康プロジェクト

第 11 回 令和 4 年 11 月 20 日（シーノ大宮センタープラザ 10 階多目的ホール）

提案テーマ 誰もが「住みやすい」「住み続けたい」と思えるさいたま市の実現

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	福島ゼミナール	日本大学	さいたま市×ブックマーク～さいたまマーク～ 栞でつくる・つながる・まちへの愛着
優秀賞	UHAS dining	人間総合科学 大学	子どもの未来を繋ぐ～あったかサポート～
	環境基盤研究室	芝浦工業大学	高温化する夏季においても 安全に安心して歩けるまちの実現
	チーム uhas	人間総合科学 大学	居酒屋×食育～お通しから見直そう～

第 12 回 令和 5 年 11 月 26 日（武蔵浦和コミュニティセンター 9 階多目的ホール）

提案テーマ 誰一人取り残さない持続可能な地域社会

賞	グループ名	大学名	発表テーマ
最優秀賞	UHAS 食堂	人間総合科学 大学	こども食堂を活用した食生活改善プロジェクト
優秀賞	福島ゼミナール	日本大学	さ eat ま ～食べて meal 育てて meal～
	江口ゼミナール	埼玉大学	やさしい行政
	林紀行ゼミナール	日本大学	彩×祭 ～地域の中に彩を～

「大学コンソーシアムさいたま」とさいたま市との連携について

1 「大学コンソーシアムさいたま」の設立とさいたま市との包括協定の締結

(1) 概要

平成 23 年 10 月 26 日、さいたま市内及び近隣の大学により、「大学コンソーシアムさいたま」が設立されました。また、同日開催された市と大学との座談会で、市と「大学コンソーシアムさいたま」が、幅広い分野において密接な協力と連携を図り、双方の発展や地域社会の発展に寄与することを目的として、包括協定を締結しました。

(2) 「大学コンソーシアムさいたま」の概要

① 目的

大学相互の自主性を尊重しつつ、大学が有する知的資源を活用した活動を行うとともに、大学相互の連携及び交流と活力ある地域社会の形成及び発展に寄与することを目的とします。

② 連携内容

教育及び研究分野における連携に関すること、会員と地域社会の民産学官との連携及び交流の促進に関することなどを行います。

③ 加盟大学

埼玉大学、埼玉県立大学、浦和大学、慶應義塾大学薬学部、芝浦工業大学、聖学院大学、日本赤十字看護大学さいたま看護学部、日本大学法学部、日本薬科大学、人間総合科学大学、放送大学埼玉学習センター、目白大学、国際学院埼玉短期大学

2 「大学コンソーシアムさいたま」と市との包括協定に基づく連携内容

福祉・教育・経済等の幅広い分野において、互いが有する人材、施設、情報等の活用について連携しています。

【主な連携事業】

- ・大学による地域の課題解決・活性化支援事業等
- ・さいたまイクボス共同宣言
- ・インターンシップ制度の活用
- ・さいたま国際芸術祭への協力
- ・各種広報用ポスターの掲示、チラシの配架協力 など

**第 13 回学生政策提案フォーラム in さいたま
開催プログラム**

事務局

さいたま市 都市戦略本部 行財政改革推進部

TEL 048-829-1106 FAX 048-829-1997

MAIL kaikaku@city.saitama.lg.jp